

2022年2月13日 佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書3章31～35節

説教題：御心を行なうとは？

千葉の神学校時代、「牧会学」の授業だったと思いますが、先生が突然、「父たちよ。あなたがたも子どもを怒らせてはいけません」(エペソ6:4)、この御言葉を読んで、私に質問をされました。「吉行さん、あなたはこの言葉をどう読みますか」「どう読みますか」と聞かれても、その頃の私は、その言葉が聖書のどこに書いてあるかさえはつきり知らなかったのです。とにかく前後の文脈を見ようと思って、どこに書いてあったか、と聖書のあちこちを開いているうちに、先生が痺れを切らして、「私は、この言葉は服従することの大切さを教えていると思います」とご自分のお考えを言われました。

今日の聖書箇所から「イエス様は(肉の)家族を軽視しておられる—(『それで良い』としておられる)」と受け取る人もいるそうですが、そうではありません。聖書は、家族のこと—(家族の中における在り方)—について色々教えています。因みに家の子どもは、もうすぐ高校3年になるのですが、親として苦労して育てたという思いがありません。むしろ、何も出来ていないという感じです。子どもが生まれた時、ある方が1枚の紙切れを渡して下さいました。そこには「育てて下さるのは神様です」と書いてありました。第1コリント3章6節に「成長させてくださったのは神です」(1コリント3:6)とあります。「リビングバイブル」は「成長させたのは神であって、私たちではありません」(1コリント3:6)と訳しています。信仰の成長のことを言っているのですが、自分達のことを思って、子どもの成長もその通りだと思っています。私達は本当に無力な親です。しかし、神様を仰ぐ時、家族の関係も、導かれて行くのではないのでしょうか。そんなことも思います。

いずれにしても神様は、私達に、家族を軽視するようには決して教えておられません。では、この箇所は、何を教えるのでしょうか。「内容」と「メッセージ」、2つ、申し上げます。

1：内容～イエスを主とする

イエス様は、カペナウムのペテロの家で群衆に語っておられました。そこに家族がやって来ます。21節に「イエスの身内の者たちが聞いて、イエスを連れ戻しに出て来た。『気が狂ったのだ。』と言う人たちがいたからである」(21)とあります。今日の箇所は「家族のその行動に対してイエス様がどのように応答されたのか」を記します。

31節に「さて、イエスの母と兄弟たちが来て、外に立っていて、人をやり、イエスと呼ばせた」(31)とあります。21節の「イエスの身内」という言葉が、さらに「イエスの母と兄弟達」と詳しく記されています。イエス様の弟達が母マリヤと一緒に、兄イエスを連れ戻そうとやって来たのです。しかし、彼等は家に入らない。人をやってイエスと呼ばせます。なぜ入ろうとしなかったのでしょうか。群衆にとってイエス様は「主」であり、イエスも「主」として対応しておられます。弟子達にとってもイエス様は「主」です。私達が神様に用いる「主」という概念とは違うと思いますが、いずれにしてもイエス様は「主」として群衆に相対しておられます。一方、家族の者は、イエス様を「我が子、我が兄」としては捉えることが出来ます。しかし「主」として捉えることは出来ない。だから群衆とは違う近づき方をするので。身内の気安さで裏から近づくようなことをしました。当然イエスが席を立てて自分達の所に来る、と思っていたと思います。でもイエス様は、そうされなかったのです。イエス様は「わたしの母とは、わたしの兄弟たちとは、外に立っている人達のことではなく、今、わたしの回りにすわっている人たちである。神のみこころを行なう人がわたしの兄弟、姉妹、また母なのです」(33～35意訳)と言って応じられるのです。家族に対して冷たい感じがします。しかしイエス様の肉親も、「身内の気安さ」的な感覚でイエス様を捉えてはいけなかった。彼等も、新しい見方でイエス様を受け取り直さなければならなかったのです。イエス様の言葉を介して、イエス様と新しい関係を築かなければならなかったのです。その時に本当の意味でイエス様の家族—(霊の家族、永遠の

家族)になるのです。そして事実、十字架と復活の後、マリヤや弟達が原始教会の中に居て、重要な役割を演じるようになるのです。彼らがイエス様を「肉の家族」としての愛情以上に、「主」として愛するようになった時、彼等は本当の意味でイエス様との深い関係—(永遠の関係)—に入ってしまったのです。

2: メッセージ~みこころを行うとは?

内容は申し上げた通りですが、イエスは「イエス様の家族となるのは『みこころを行う人』だ」と言われました。その意味でイエス様を「主」と仰ぐ私達にとっても、この箇所から教えられる大切なメッセージは、「みこころを行う」とはどういうことか、ということです。2つ、申し上げます。

1) 主イエスの話を聴く

イエス様が「神のみこころを行う人はだれでも、わたしの家族です」と言われると、私達は「はたして私は、神のみこころを行っているだろうか」と心配になるのではないのでしょうか。しかしこの箇所を読むと、イエス様は「自分の回りにすわっている人たちを見回して…『ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです』」(34)と言われたのです。そして「神のみこころを行なう人はだれでも…」(35)と続くのです。その「わたしの兄弟、姉妹、また母なのです」(35)と言われた人達は、何をしているかという、イエス様の話に聞き入っている人達です。他に何か具体的なことをしている訳ではありません。その意味で「神のみこころを行う」ことの基本は、そして最も大切なことは、「イエス様の話を聴くこと」なのです。

「ルカ 10 章」に有名な「マルタとマリヤ」の話があります。イエス様がマルタとマリヤの家に来られました。姉のマルタは、イエス様をもてなそうとして忙しく立ち働きました。一方のマリヤは、イエス様の足下にすわってイエス様の話に聞き入っていました。マルタは、そのうちマリヤのことが腹立たしくなって、イエス様に文句を言います。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください」(ルカ 10:40)。それに対してイエス様は言われます。「どうしても必要なことは…一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです」(ルカ 10:42)。イエス様が何よりも私達に願っておられるのは、私達がイエス様の話を聴くことなのです。その意味で、今、聖書を通してイエス様の話を聞いておられる皆さんは、みこころを行っておられるのです。どうぞ「私はイエス様の家族なのだ」と安心して下さい。

そして願わくは、普段に聖書に聴き、イエス様の話を聴けると良いと思います。そこから始まるのです。そうでなければ…。イエス様に一生懸命仕えようとしたマルタは、結果的にイエス様に文句を言うてしまうことになったのです。私達の人間的な常識で、みこころを生きようとしても、上手く行かないことが多いのではないのでしょうか。まずイエス様に聴くこと、それが土台、いや、最も大切なことなのです。

前にもお話したと思いますが、カナダにいる時、親しくして頂いた韓国人の先生が「弟子訓練」という言葉を盛んに使われましたので、私は伺いました。「『弟子訓練』とは、何をすることですか」。その先生は言われました。「御言葉を学ぶことです。御言葉が入ると、その人は変えられます」。ここでイエス様の家族だと言われている人々の中には、もしかしたら、エルサレムに都上りをしていて、イエス様の十字架の時、「十字架につけろ」と叫んだ人がいたかも知れません。その可能性もあるのです。しかし、その人達に対する神様の、イエス様の愛は変わらない。だから、イエス様の言葉が入っていた人達は、御言葉が働いて、またイエス様への信仰に帰って行ったのではないのでしょうか。私自身がそうなのです。小学生の時、3年間、教会学校に通いました。しかし、中学生の時に教会から離れ、大学に入った頃は「もう教会に行くことはない。私はキリスト教とは関係のない人間だ」と決めていました。ところが、ある問題の中で、御言葉が甦って来て、私の心の中で働きました。「すべ

て重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ 11:28)。このみ言葉に導かれて、私は教会に戻って行ったのです。

いずれにしても、「みこころを行う」とは、神の御言葉を聴くこと、それが何よりも大切なことだと思います。

2) 愛に生きる

「みこころを行う」、2つ目は、愛に生きるということです。「『みこころを行う』とは、イエス様の話を聴くことだ」と申し上げました。しかし、イエス様の話を聴いてそれで終わり、でもないのです。

先日の「デイリーブレッド」にこんな話がありました—(読まれた方もいらっしやるとは思います)…。アメリカの話です。メキシコ系アメリカ人の女性が、子どもを連れてアイスクリーム屋さんに入りました。すると店員は、子どもに差別的な言葉を投げかけました。彼女は、子どもを抱き寄せると、後から入って来たご主人の方を見ました。ご主人は黒人でした。注文をすると、店員はしかめ面で返事もしませんでした。彼女は、このような差別を受け続けて来たのです。しかし彼女は、恨み心を悔い改め、「赦す心を下さい」と祈るのです。私は、この話を聴いた時、人間の心の中にある罪を痛烈に思いました。そして、皆がイエス様に教えられ、イエス様に導かれるようにならなければ、世界に本当の和解も、平和も来ないと、強く思いました。アメリカは、キリスト教国だと言われます。人口の10%の人が、毎週、教会に通っているのです。この店員の方がクリスチャンだったのかどうか、分かりません。しかし、ここで教えられるのは、差別を受けた女性が、イエス様の言葉に従い、「赦す心を下さい」と祈ったということです。そこに、社会が変えられて行く秘訣を感じます。

話が少し逸れましたが、私達は、イエス様の話を聴いて、そして出来るならば、神様の、イエス様の助けを頂いて、イエス様の愛に生きること、それが必要ではないでしょうか。返事もしない人ではなくて、祈る人になること、それが必要ではないでしょうか。その時、私達がイエス様に聴いたということが、本当に生きて来るのではないのでしょうか。

「昨年、『鬱』になった」という話を何度かしましたが、私は「鬱」を通して神様から1つの語りかけを頂きました。それは「自分のためだけに生きることを止めなさい」という語りかけでした。「それが人生を張りをもって生きる秘訣だ」ということでした。聖路加病院の院長でいらした日野原重明さんと星野富弘さんとの対談の本を、改めて読み直しました。気づいたことがありました。ある個所で、お2人が同じようなことを言っておられるのです。日野原先生は、赤軍派の「よど号ハイジャック事件」に遭遇しておられます。命の危険があったのです。その経験に触れて、こう言っておられます。抜粋します。「私のいのちは与えられたものなのだとつくづく感じました…その経験が、私の生き方を変えたのです。今までの自分は、有名な医者になり、いろいろな仕事をやるのが目標だったけれど、こうして助けられたんだから、これからは自分中心でない、もっと外に向いた、人のためになるような生き方に転換をしたいと強く思うようになりました」。星野さんは次のように言っておられます。「いろいろと経験してきて、自分のためにだけ生きようとした時は、これはほんとうの意味で自分のいのちを生かしているのではないなと思いました。いくら自分で欲しいものを手に入れ、うまいものを食べても、それはそこで終わってしまうんですね。いちばん喜びを感じるのは、人のために、他者のために何かできた時や、自分のやっていることが他の人に喜んでいただけた時なんです。何か人の役に立てた時、いのちがいちばん躍動していると思うと同時に、自分自身の中にも感謝の気持ちが出てきます。いのちというのは、自分だけのものじゃなくて、だれかのために使えてこそ、ほんとうのいのちではないかと思いました」。私は、遅ればせながら分からせてもらったことに、お2人から「それでよし」という確認を頂いたような気がしました。

イエス様の話を聴いて、聖書の言葉に聴いて、家族に、隣人に、誰かに対する愛に生きる、その時、私達は、本当の生きる満足というものを得ることが出来るのではないのでしょうか。そしてその時、

私達は、「イエス様に聴く」からもう一步踏み込んだ「みこころを行う人」になることが出来るのではないのでしょうか。

3:最後に

初めに、イエス様を見上げるところで、家族の関係も導かれるのではないかと申し上げました。1つの話をして終わります。戦後すぐの話です。

この女性は、お母さんが亡くなって、お父さんが再婚するのですが、新しいお母さんに心を赦すことが出来なかったのです。お父さんの愛を独占したかったのです。それが反発となって現れ、事あるごとにお父さんとぶつかり、ある日、新しいお母さんの前でお父さんから強く叱られたことで爆発するのです。「お父さんは忘れたの、お母さんに後妻はもらわないって約束したじゃないの。お母さんは呪っているわ。私も呪ってやる。お母さんといっしょに…」。知っている限りの呪いの言葉を両親にあびせかけました。お父さんは言いました。「出て行け。娘でもない、親でもない。どこへでも行ってしまえ」。

彼女は、トランク1つをもって出て行くのです。それから仕事を転々とします。しかし、上手く行かないし、満たされません。さらに、自分が結核に罹っていることも分かりました。彼女は行く所がなくなり、修道院に入るのです。しかし、そこにも安住の地を見つけることは出来ませんでした。しかし、東京の米軍の病院で働き始めた時、1人の米兵と友人になり、その米兵の帰国直前、彼に引張られて教会に行きます。しかし、自分はここに相応しくない、と拒否的な態度を取りました。その彼女を見て、友人の米兵は、彼女のために涙を流して祈ってくれたのです。「肉親はあなたを捨てたかもしれない。しかしイエスはあなたのために死んで下さったのですよ」。彼女は、いつの間にか道に跪いて罪の赦しを求めています。その時、心に響く声がありました。「この我が子、死にてまた生き、失せてまた得られたり」(ルカ 15:24)。魂の故郷に帰った彼女は、神の御手の内に初めて安らぐことが出来たのです。しかし神は語られました。「汝の父母を敬え」(出エジプト 20:15)。「汝の呪う時、汝も呪われるべし」(詩篇 109:17)。彼女は、苦しい葛藤の時を過ごしますが、ついに言いました。「帰りましょう。主が私にして下さった大きな御業を父に見て頂きます」。そして、故郷に帰って行くのです。両親は、涙を流して喜んで、彼女を迎えてくれるのです。

イエス様の家族になる、そして聴いたことを行う、それは、私達の人間関係にも祝福をもたらすのです。「みこころを行う」、それは祝福の方法ではないのでしょうか。